
捨てね娘

凧澤 唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てね娘

【Nコード】

N8842Y

【作者名】

風澤 唯人

【あらすじ】

平凡な高校生活

なにも変わらない生活のなかを生きる男子生徒、笹倉真琴

そんな真琴の幼なじみの性格最悪、自分に逆らえる男子はいないと

言う女王様、来栖深雪

謎の女の子、猫苗柚子

そんな三人がひょんなことから出会い、ひょんなことからゆるーい

詐欺をし始める。

そんなコメディ。

*

作者、素人のために文才に疎い部分があります……

それでも大丈夫な方、お読みください…

詐欺と言いましても、政治や株は絡まない高校生ができる範疇でのゆるーい詐欺です。

ぶろろーぐ

風が冷たい

最近は暖冬だと言っけれど、甚だ疑問である。

首に巻いたマフラーの隙間から伸びる、携帯音楽プレイヤーのコードを指でいじくり回しながらの帰路。

普段は学校がある時間帯なのだが、今日は県民の日ということで休みなのだ。

ずっと家でごろごろしていると、仕事で夜まで帰って来ない親のせいで昼飯をコンビニに買いに行った帰り。

商店街と自分の住む地区を繋ぐ長めの橋をだらだと歩いていると、行きには反対側を歩いたから気づかなかった段ボールがポツリ。

中からは可愛らしくにゃーにゃーと鳴く声がする。

先ほど買って来た買い物袋のなかから半額で安売りされていた、魚肉ソーセージを出して段ボールに近づく。

案の定中には子猫が一匹。俺が覗き込むと明らかに敵意剥き出しで、箱の隅で毛布にくるまっている。

「なんだよ、怖がることないだろ」

自分は昔から動物には好かれならしい。散歩中の犬には吠えられ、飼っていたハムスターには必ず指を噛まれ、仕舞いには動物園の動物達から威嚇される。

悪いことをした記憶はないのに、だ。

「……はぁ……ほらよ」

いつまでたつても近寄つて来ない猫を見ていると段々と悲しくなってきたので、ソーセージを段ボールに放り込むと立ち上がる。

猫はいまだに警戒しているが、ソーセージを見るとこちらをジッと見ながらちょいちょいと手を伸ばしている。俺はそんな猫を見ながら少し和み、再び橋を渡りきろうと歩き始めた。

しばらく歩いているともう少し先に段ボールがもう一個。しかし何故か違和感が拭えない。

誰がどうみても明らかな違和感。俺は一応、あくまでも一応先ほどと同じように魚肉ソーセージを取り出して近づいて行く。

「…………っ」

段ボールの中の生き物はこちらを見ると直ぐ様ソーセージに気付
き、明らかに期待した目をキラキラとさせながらこちらを見ている。

俺だって鬼ではない、先ほどより好意的な生き物に少しだけ嬉し
そうに頬が弛んだかもしれない顔を擦りながらイヤホンを外し、ソ
ーセージをその生き物の口元にちか寄せる。

すると、驚いたことにその生き物はソーセージを手で掴み、器用
に食べ始めたのだ。しかもそれだけではない。

「……………美味しいっ」

喋ったのである。

ここでその生き物を見ながら考えた。インコだって喋る。猿だっ
て手で掴み食べる。あり得ないことではないのだ。もちろん、人間

はこれらを両立しているが、寒空の中段ボールに入って震えることはない。……とは一概には言えないが、大体はそうなので人間のせんはない。

ではなにか。

わからないので立ち去ることにした。

「…ま、待ってくださいっ!」

今、なにか聴こえた気がするが気のせいだ。イヤホンを再び耳にはめれば幻聴は止み、家についたら全部わすれる。

「あう……」

イヤホンをつけてからだ、何故か目の前を先ほどの生き物がぴよんぴよこと跳ね回っている。まるでなにかを伝えようとしているよ

うだが、幻覚なのでスルー。

寒さが肌に刺さるようだという表現があるが、それと酷似したものだと思えることにした。寒さが網膜と鼓膜を刺激し、あらん幻想を見せている、ということだ。

「むうう……とりやつ」

イヤホンがその生き物によつて無理やり引き取られた、がそれはきつと風が吹いたのだらう。多分イヤホンの部分だけを鎌鼬的なにかが吹き抜けたのだ。

「えへへ、無視するから取っちゃいましたっ」

やばい、死ぬのかもしれない。

幻想が度を過ぎている。

あれか？今日が休みだからといって、昨晩夜更かしをしてゲームをやつてたからか？

それなら納得が……できる訳がない。

「……あーゆーモンキー？」

とりあえず全国で使われている英語を自分なりに駆使してコンタクトしてみた。余談だが英語は進級はできる、といあぎりぎりである。そもそも英語って役に立つのか？

……閑話休題

「も、モンキー！？えと、あの、のーモンキー」

こちらの言葉は理解できらしく、なにやらぶんぶんと顔を振りながらそう言つとジリジリとこちらに詰め寄って来やがる。宇宙人？UMA？とりあえず、怖い。

「えと、ごめんなさいっ！！」

こちらとしてみればそちらが嫌な訳で、いつ捕食されるかもわからないので顔を逸らしながらとりあえず謝ると、全力でその場から走った。

「っ！ ど、どこ行くんですか！」

急に走られると不意をつかれたらしく一気に差は広まる。後ろチラリとを振り返るとなにやら大きなキャスターバッグを派手に転がしながらこちらを追いかけて来てやがる。

しかし、俺をなめてもらつては困る。伊達に怠け者の真琴とは呼ばれてはいないのだよっ！

しばらく独走状態をキープをしていた筈なのだが、

「とりやつー！！」

……気づいたら後ろからかなり勢いよく体当たりをくらい、買い物袋に入っていた卵を絶対に割られないようにと自分を犠牲にして守りながら派手にこけていた。

自分を犠牲した成果として、卵は守れたのだが尋常じゃないくらい頬が痛い。顔の横をぎりぎりでガードレールがあり、どうやらそれにかすっただけらしい。血で濡れているのがよく分かる。

「ふふふ、逃がしませんっ」

「いや、ふざけんな」

うつ伏せに倒れる俺の上に馬乗りになりながら笑ってやがる。腰の辺りに乗りながらぐわんぐわんと揺れながらこちらの背中を手をおいて「こうみえても音速の……いや、光速の……ゆずゆずとは呼ばれてないのですっ」と明らかに今作ったようなことを言いながらこちらの顔を覗きこんでくる。

「……おり」

「猿だとか、人を見た目で判断しちゃ……血がでてますっ！」

全くこちらの話を聞く様子はない。ただ一人で慌てながら茶色い髪の毛をぱたぱたと揺らしながら焦っている。つか、お前のせいだ、間違いない。

というか恥ずかしい。人目とかそういう問題ではなく単純にこんな格好と言ったのである。そう思いながら身体をよじらせていると上でがっしりと態勢を保ちながらなんかぶつぶつ言っている憎き生き物の顔が近づいてきた。

「えと、えと、応急措置しなきゃっ!」

その後、頬にざらりとした感触。

応急措置という項目で傷口を

ペロリと舐められた。

どうやら動物に嫌われ、『捨て猫』に嫌われるらしいが、『捨てね娘』には好かれる体質らしい。

ぶろろーぐ（後書き）

ふー、疲れたー

素人だけど頑張ってきた気がする。

お読みいただきありがとうございます

よかったら次回も温かい目で見守ってください…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842y/>

捨てね娘

2011年11月26日16時45分発行